

町家および街路空間における祭礼時の空間演出に関する
調査研究AN INVESTIGATIVE RESEARCH ON SPATIAL
PRESENTATIONS AT *MACHIYA* (TRADITIONAL
TOWN HOUSES) AND THEIR STREET DURING
FESTIVAL RITES

主査 増井 正哉
 委員 谷 直樹 西岡 陽子
 新谷 昭夫 岩間 香
 碓田 智子 中嶋 節子

Ch. Masaya Masui
 mem. Naoki Tani Yoko Nishioka
 Akio Sintani Kaori Iwama
 Tomoko Usuda Setsuko Nakajima

[研究論文要旨]

[SYNOPSIS]

伝統的都市祭礼においては、曳山や御輿などのシンボルがその中心となるが、同時に街路および街路に面する建物が演出され、その都市独特の空間的特徴を生かした例が多い。本研究では祭礼時の町家を中心とした空間演出に着目し、その現状を詳細に調査し、祭礼時に町家および街路がどのように演出されているか、また、祭礼時の利用と演出が、町家や街路空間の形態にどのような影響を与えているのかを明らかにする。

調査対象としたのは、西日本各地の都市祭礼である。まず、各地をできるかぎり踏査し、演出の実態を調査した。その結果、多くの都市祭礼で、宗教的なシンボルである曳山のほか、通りに面したファサードを幔幕や提灯で飾り、また街路に面した室の前面を開放し、屏風などを飾って街路と一体となった演出を行っていることが明らかになった。また、この研究会で調査した京都祇園祭における演出との共通点が多く、影響を受けていた。

この踏査対象の中から、特徴的と考えられた5地区（亀岡、鞍馬、大津、日野、城端）について、さらに詳しく調査を進めた。建物種別、幔幕などの街路空間の演出要素の分布など都市空間レベルの調査のほか、町家や会所のお飾りの実測など建物のレベルの調査を行った。その結果、祭礼のための伝統的共用施設が積極的に維持されている例（亀岡）、建物更新が祭礼時の演出に影響を与えている例（鞍馬）、曳山鑑賞を意識した独特の形態が町家にみられた例（大津、日野）、祭礼での演出のために町家を大規模に改造する例（城端）など、祭礼時の演出が町家や街路空間に大きな影響を与えていることが明らかになった。

In traditional Urban Festivals, symbols such as *hikiyama* and *mikoshi* are the central objects of presentations. However, streets and the structures on the street sides are also specially presented for the festival rites at the same time. In many cases, distinctive spatial features of the city are well-utilized for the presentation. This research focuses on the spatial presentations for a special day, mainly at *Machiya* during festival rites and aims to investigate the current situation in detail, revealing how these *Machiya* and their streets are utilized for the presentations during the festival rites, and how these presentations affect the spatial formations of *Machiya* and their streets.

The research subject is urban festivals which are held in various cities in the western part of Japan. First of all, urban festivals in various cities were explored as much as possible and the street utilizations were investigated. As a result, we found many common elements with the Kyoto Gion Festival we investigated before by this research group in regard to the street presentation, revealing the actual influence. Other than the religious symbol, facades along the streets are decorated with curtains and lanterns and the front sides of the chambers facing the streets are left open and decorated with the folding screens, creating integrated presentations with the streets.

Among the exploration subjects, five distinctive districts (Kameoka and Kurama, Kyoto pref., Otsu and Hino, Shiga pref. and Johana, Toyama pref.) are researched further in details. Other than the district level research such as the structure classification and distributive research on the presentation elements such as decorative curtains, structure level researches such as the survey on the ornaments used at *Machiya* and clubhouses were conducted. As a result, we found that the spatial presentation for festival rites influences *Machiya* and their street. For example, traditional public facilities for the festivals are intently preserved in Kameoka, presentations are influenced by renewals of the traditional form of *Machiya* in Kurama, distinctive forms for the appreciation of *hikiyama* were seen in Otsu and Hino, *Machiya* are altered on a large scale for the festival presentation in Johana.

町家および街路空間における祭礼時の空間演出に関する調査研究

主査 増井 正哉*¹
委員 谷 直樹*² 西岡 陽子*³
新谷 昭夫*⁴ 岩間 香*⁵
碓田 智子*⁶ 中嶋 節子*⁷

キーワード：1) 町家, 2) 街路空間, 3) 都市祭礼, 4) 町並み,
5) 空間演出, 6) 都市景観, 7) デザイン・サーヴェイ,
8) 建物更新

1. はじめに

1.1 研究の目的

伝統的都市祭礼においては、曳山や御輿などのシンボルがその中心となり、同時に街路および街路に面する建物も演出される。それらは、それぞれの都市の空間的特徴をうまく活用している例が多い。本研究では、こうした空間演出に着目し、その現状を詳細に調査して、祭礼時における町家および街路の利用と演出の実態、さらには、利用と演出の、町家や街路空間の形態への影響を明らかにすることを目的としている^{#1)}。

1.2 研究の方法

1.2.1 都市祭礼の踏査

調査対象としたのは、西日本各地の都市祭礼である^{#2)}。まず、各地をできるかぎり踏査し、演出の実態を調査した。その結果、多くの祭礼において、表構えを幔幕や提灯で飾り、また街路に面した室の前面を開放し、屏風などを飾って街路と一体となった演出を行っていた^{#3)}。また、この研究会で調査した京都祇園祭における演出^{#4)}と共通点が多く、影響を受けていた。

1.2.2 詳細調査の内容

踏査対象の中から、特徴的と考えた地区について詳しく調査を進めた。具体的には、幔幕などの街路空間の演出要素の分布など、街路空間レベルの調査のほか、町家や会所のお飾りの実測など、建物レベルの調査を行った。また、街路や町家の基本的性格・構造を把握するため、町並みの現状、町家の実測等の調査もあわせて行った。

1.3 研究成果の概要

以上の結果、祭礼時の利用を目的に共用施設が積極的に維持されてきた例（亀岡）や、建物更新が祭礼時の演出を変化させた例（鞍馬）、曳山鑑賞を意識した独特の

町家の形態がみられた例（大津）、棧敷窓という独特の装置が生まれた例（日野）、演出のために町家を大規模に改造する例（城端）など、祭礼時の演出が街路空間や町家の形態に影響を与えていることが明らかになった。

2. 亀岡

2.1 亀岡祭と町会議所

亀岡は京都府中部に位置し、明智光秀の築城になる亀山城の城下町で、明治2（1868）年に、現在のように改名された。亀岡祭は上矢田町に鎮座する鍛山神社の秋季例祭で、近世には旧暦9月25日を中心に行われていた。亀岡祭の起源については不明であるが、中世から神事が行われていたらしい。その後、戦乱で途絶え、現在の祭礼の形式は、延宝9（1681）年に再興されたものである。『丹波国桑田郡矢田郷矢田社之祭法』には、復興になった祭事の内容を記しているが、9月1日に藩領の境8カ所に榊を挿して結界とし、2日には「城中町屋」に榊を挿し、15日は道橋修理、20日に御旅所の掃除と番所造作と続き、22日の御輿飾り、24日の御船造りと御矛飾りを経て25日に神幸が行われた。26日から29日に御輿は旅所にあって様々の行事が行われ、晦日に還御した。この祭事復興は、単に旧規の再興ではなく、近世城下町亀山の成立にふさわしい祭礼として再編成されたものである。神幸の道筋の道普請や掃除が行われ、町家に榊を挿すなど、祭礼における空間演出の古い姿がうかがえる。

延宝度は神事の復興が主眼であったが、寛政12（1800）年の成立とみられる『矢田祠記別録坤』を見ると、11基の曳山や曳山の名が確認でき、この間に山鉦の整備が行われたことがわかる。各町における山鉦の建造年代は不明な点が多いが、墨書などから、18世紀半ば以降に順次整備されており、同記の内容と符合している。また、趣向を凝らした行列が城下を巡行していたことがわかるが、

*¹ 奈良女子大学生活環境学部 助教授

*² 大阪市立大学生活科学部 教授

*⁵ 摂南大学国際言語文化学部 助教授

*³ 大阪芸術大学芸術学部 助教授

*⁶ 福井大学教育学部 助教授

*⁴ 大阪市住宅供給公社企画部 主査

*⁷ 大阪市立大学生活科学部 助手

表2-1 亀岡祭の町会議所一覧

町名	町 会 議 所				祭礼時の飾り場	
	名 称	会議所の建築	鉾蔵の建築	神社・仏堂の建築		所在場所
北町	北町会議所	木造平屋	—	地藏院	町内西裏西寄	*会議所座敷
西町	西町会議所	木造平屋	土蔵造平屋	行者堂	町内東類中央	会議所座敷
紺屋町	紺屋町会議所	木造平屋	土蔵造2階	—	町内西類七寄	会議所座敷
本町	本町会議所	鉄骨造平屋	土蔵造平屋	—	町内北裏中央	町内松永家
柳町	柳町会議所	プレハブ平屋	木造平屋	—	町内北類西寄	町内馬場家
矢田町	矢田町会議所	木造平屋	木造平屋	—	町内西北隅	—
京町	京町会議所	木造平屋	—	天満神社	町内南類東寄	町内矢田家
上矢田町	上矢田町会議所	木造平屋	—	陽雲院境内	町内中央東寄	—
旅籠町	旅籠町会議所	木造平屋	木造平屋	—	町内南類西寄	—
新町	—	—	—	—	—	—
呉服町	呉服町会議所	木造平屋	—	—	町内北類西寄	会議所座敷
西堅町	西堅町会議所	木造平屋	—	—	町内北類中央	**会議所座敷
東堅町	東堅町会議所	木造平屋	—	八坂神社・稲荷神社	町内南類東端	**会議所座敷
三宅町	三宅町住民センター	RC造2階	会議所1階	大日堂	町内南類中央	—
塩屋町	塩屋町会議所	木造平屋	木造平屋	—	町内西南隅	*餐廳

注)年号は建築年代(現地調査及び昭和63年亀岡市作成の「自治会館等施設台帳」を参照した。
*現在は行われていない **隔年に使用される

町家や街路空間の演出については史料を欠いている。

現在の亀岡祭は新暦の10月24日に宵宮、25日に山鉾巡行が行われる。祭りが近づくと、巡行に参加する町々では準備にとりかかる。大半の町では、20日に鉾蔵から御神体や山鉾の懸装品を出し、町内の町会議所や個人宅に飾って人々に披露し、24日の宵宮になると、飾りを山鉾の上に移す。一方、24日の宵宮になって町会議所や個人宅で飾りをする町もある。いずれの町も24日には山鉾に懸装品を飾り付け、夕方には山鉾の提灯に灯を入れて宵宮を迎える。個人宅で屏風を飾る家も、わずかではあるが残っている。25日には山鉾が勢ぞろいし亀岡の町を巡行する^{注5)}。

2.2 町会議所の空間構成

亀岡祭でお飾り場として重要な役割を演じている町会議所は、旧城下の町人町の14ヵ町に現存するが、その多くは町内の中央に位置し、その中核施設であることを物語る。町会議所の建築は会議所と鉾蔵からなり、神社や仏堂が同一敷地内に設けられるものもある(表2-1)。会議所の建物は、通りから奥に入ったところに独立して建てられ、表通りに面して隣家と軒を接して建てられるものはない。間取りは続き間座敷をもつものが多く、様々な規模の集会に対応できる。鉾蔵は、山鉾を組み立てたまま収納できるように、外観は平屋建でも階高を高くしている。神社に併設された東堅町会議所には祇園社の背後に会議所の建物があり(図2-1)、西町会議所では門の横に行者堂が建てられている(図2-2)。

2.3 町会議所成立の背景

亀岡で町会議所が成立した要因は、次のように考えられる。ひとつは中世後期に惣的発展を遂げた農民たちが、宗教的な色彩を帯びた会合を、寺院や神社でもっていたことである。天保12(1841)年の跋文をもつ『桑下漫

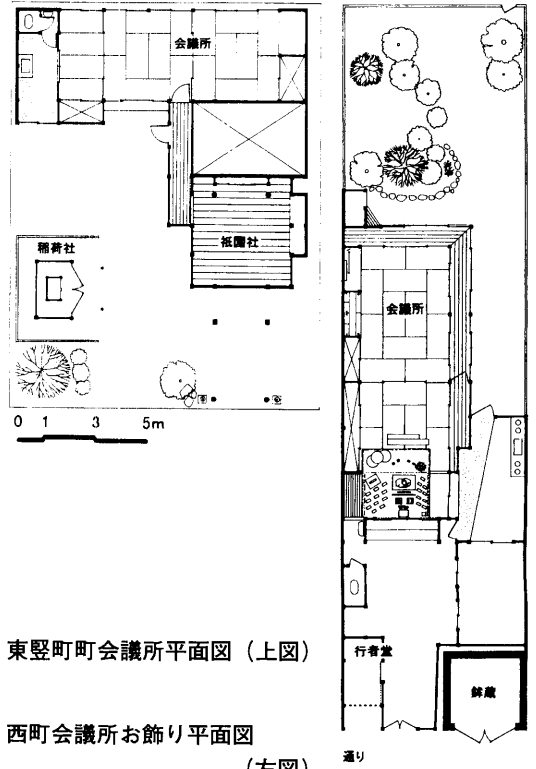


図2-1 東堅町町会議所平面図(上図)

図2-2 西町会議所お飾り平面図(右図)

録』によると、江島里村の蔵宝寺阿弥陀堂は、「例年正月七日、修正会と称して、広瀬・野々村之両氏集会して、大師の御手判を以牛玉を調、鎮火安産之守にて、往古より於村中、右之両災にかゝりし者無之」とあり、仏事の際に村人の集会の場になっていた。現在の会議所をみると、神社や仏堂に併設されていることから、町内の会議所と、周辺の農村の神社や寺院の境内にあった村会所との関係を想定することができる。

また、会議所の敷地に祭礼の山鉾を収納する専用の鉾蔵が存在することも、会議所が宗教的行事と深い関係をもっていたことを示唆している。

もうひとつは、城下の町方支配のため設けられた「町会所」の存在である。同じく『桑下漫録』によると、呉服町の「町会所」について、次のように記している。

「同所有之町会所 往古塩屋町西突当有之、今以会所屋敷ト云。上ノ間八畳、中ノ間六畳、下ノ間六畳、右ザシキ相用ひ候品。一、町方惣名主共へ町年寄申渡事。一、同心小頭等立合、町年寄町人へ諸事申渡事。一、町方之者呼出吟味又申渡事。一、呼出捕括申付候事、善悪取斗。一、町名主共へ相談之事。一、名主共相集相談事有之。右之類ニ用之席ニ相候也」

この「町会所」は、城下町の特権町人である町年寄が名主に法令や指示を伝達したり、諸事件の吟味を行うなど、上意下達の間であった。しかし町年寄が名主に相談をしたり、あるいは名主の間で相談をもつ場合もあった。「町会所」には3間の続き間座敷が設けられていたが、それは、町方支配のために座敷の格式性を確保するだけ

でなく、多人数の会合にも対応する続き間座敷を必要としたためでもあろう。

江戸時代の亀岡には、中世後期の惣的結合による農民の集会所と、亀山城下に設けられた「町会所」における町年寄や町名主の寄合の伝統があり、城下の町方でも寄合がもたれたと考えられる。最初は有力者の町家を持回りにしていたのが、やがて専用の会議所をもつようになったのであろう。その時期は文献上からは明らかではないが、遺構の状況からは明治初期と推測される。同じ敷地に、町内の財産である山鉾を保管する鉾蔵も建設され、現在の町会議所の構成ができあがったと考えられる。

亀岡祭は戦前までは近隣では最大の秋祭りとして隆盛を極め、町会議所の飾りや町家の屏風飾りも行われていた。戦争中は中断し、戦後に復興したが、戦前の規模にもどっていない。しかし拠点施設であった町会議所では、現在も祭りの準備やお飾りを行い、山鉾を保管するなど、その機能は現在も存続している。その背景には、ふだんの町内の寄合や夏の地藏盆・大日講の会場として頻繁に利用され、近年はゴミの分別収集のステーションが設けられるなど、地域施設として定着していることがあげられる。今後、祭りのための施設としてその役割に改めて注目し、地域文化財として再評価し、保存・修復・整備をはかっていくことで、町と祭りの活性化に寄与すると考えられる^{注6)}。

3. 鞍馬

3.1 火祭りの概要

鞍馬は京都北山・鞍馬寺の門前に発達した山あいの街村である。今でもその歴史的町並みをよく残している^{注7)}。火祭りは、寺の鎮守社であった由岐神社の祭礼で毎年10月22日の夜に行われる。夕方6時の神事触れがあると、村人に担がれた大小の松明が街道を行き交いはじめる。時間とともにその数は増え、夜9時ごろ、神迎えのために御輿の前に松明が集められると、火祭りのクライマックスを迎える。その後、御輿が集落内を巡行し、夜遅くにお旅所に収められて祭りはようやく終了する。

3.2 街道の空間演出

鞍馬の集落は、鞍馬街道に沿ってほぼ南北に1.5kmにわたってのびる。現在は4つの地区に分かれているが、もとは南から下在地・中在地・上在地の3地区からなっていた。集落の中央寄り、街道が大きく鍵型に折れ曲がったところから鞍馬寺への参道がのび、少し奥まったところに山門が建つ。さらにこれを登ると、途中で由岐神社が鎮座する。また、お旅所は集落の南寄りに位置する。

22日の本祭に先立ち、16日の夜には宵宮のしつらいが行われる。朝、神社とお旅所に注連が張られ、鞍馬寺の山門の前には竹と注連で聖域を区画する浄身竹が立てら

れる。各家でも夕方までに軒下に提灯が吊られる。夜、本殿での宵宮祭が終了すると、名衆宿（後述）の前にはオハケ（笹竹や榊の先に付ける物忌の標識の幣）が立てられ、また各家に対してイミサシ（祭りを営む場所を清めた標示として、榊の枝などを立てる）が行われる。本殿から下げられてきた榊の枝を各家の玄関横に1本ずつ挿してまわる。以前は、この日に火改が行われ、かまどの灰を捨て残っている食物も棄てたという。この日を境に物忌の期間に入り、注連や榊はそれを表わしている。

22日の本祭には、各家の前にかがりや衛火が用意される。かがりや松の木で1.5mほどの高さに組まれ、街道沿いの空き地や駐車場に置かれる。その数は今日では少ないが、以前は街道に多くのかがりやが並んだ。衛火は、鉄製のかごに細かく割った松を入れたもので、夕方、祭りが始まるころに点火され、祭りを盛り上げている。

3.3 町家の空間演出

3.3.1 七組仲間と宿飾り

鞍馬には江戸時代から七組仲間と呼ばれる住民組織が成立していた。全村が大惣・名衆（主）・宿直・僧達・太夫・大工衆・脇の7つの組仲間に分かれて、村を運営していたのである。このうち、鞍馬寺と密接な関係をもつ大惣仲間が最も力をもっていた。神社が中心の宮座に対して鞍馬の七組仲間は寺座とも呼ぶべき組織であった。

今日でも火祭りは、組仲間によって執り行われており、組仲間ごとに持回りで宿が決められている。なお、7組のうち大惣と脇仲間は下・中・上在地ごとに宿が設けられる。前述の名衆宿は、名衆仲間の宿である。

宿を務める家では、22日の朝または昼から軒下に提灯が吊るされ、幔幕が張られる。また街道に面するオモチノマでは、ゴウス（御供の野菜等を入れた木箱）や御神酒などが飾られる。これが宿飾りである（写真3-1）。平成9（1997）年の火祭りでは、太夫仲間を除く10カ所の宿飾りを確認することができた。

3.3.2 宿飾りの演出

脇以外の各組仲間の宿飾りは、まず手前からゴウス、御神酒と食物、一番奥に鉾先か御幣を階段状に並べる。



写真3-1 伝統的町家における宿飾り

鉾先を飾るのは下・中大惣、大工衆、僧達で、これらはすべて御輿の巡行で鉾を出す組仲間である。一方、御幣を飾るのは名衆と宿直で、鉾先の代わりに飾られている。

このほか、組仲間独自の所有物、例えば鉾に付く吹散は鉾先の後ろに垂らす。また太鼓・鎧などがある場合は横に並べられる。そしてこれらの背景に屏風が立てられ、生け花が添えられる。屏風は全て六曲一雙または六曲一隻である。ただ、一隻で背景的に使っている場合は、部屋に幔幕を張り巡らせて壁面を隠すよう工夫されている。次に、脇仲間の場合は御輿巡行で用いられる綱とゴウスが飾られ、背景に屏風が立てられる。

宿以外でも、独自にオモテノマに屏風や生け花を飾る場合がある。宿飾りと同様に屏風は正面に向かって立てられ、その前に生け花などが飾られる。ただ、見せる時間が限定されているためか、軒数はわずかである。

3.4 町家の宿飾りの変容

鞍馬の民家は、トオリニワに沿ってオモテノマ、ダイドコ、ザシキが1列に並ぶ、1列3室型の町家を基本とする。居室が鍵型に並ぶ、あるいは2列になる場合もあるが、数としては少ない。そして、オモテノマの正面は間口いっぱいには掃出しの開口部がとられ、平格子が装置される。宿飾りや家飾りの時には、開口部は全面的に開放されて人々は家の外から眺めることになる(図3-1)。

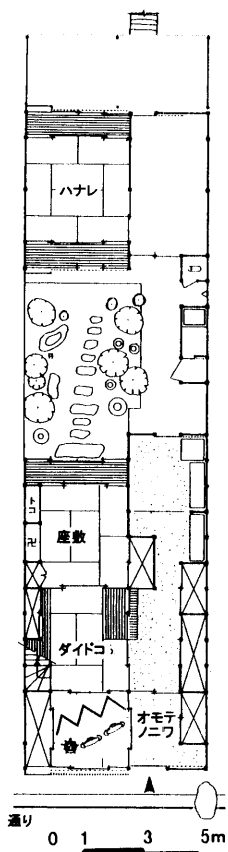


図3-1 鞍馬お飾り平面図

近年は町家の建て替えが進み、新しい形式の建物で宿が行われることが増えてきている。そのひとつが大工衆の宿である。街道に面して部屋が配されるが、開口部が腰高の窓となり、建具がアルミサッシのため窓ガラスがはめられたままで、宿としての趣はかなり異なったものとなった。アルミサッシの建具はこのほか、下大惣の宿でもみられたが、こちらは掃出しとなっており、祭りの演出への配慮がみられた。中脇の宿を務めていた家は、正面に縁が通り、宿飾りはその縁を使って行われていた。ゴウスと綱は本来は前後に配されるべきであるが、奥行きが浅いために左右に置かれ、屏風の代わりに幔幕が張り巡らされていた。ここでは、宿飾りの配置等まで変更が加えられていた。

このように、町家の空間演出はその建築形式と関連が深く、したがってその形式が変わることにより空間演出のあり方も変容してくるのである。

4. 大津

4.1 大津町と大津祭

大津市(滋賀県)は、江戸時代以降大津町と呼ばれた地域を核に発展してきた。江戸時代の大津町は、大津百町と称される規模を誇り、東国・北国からの物資が荷揚げされる港町として、また、東海道の重要な宿場として東海道では江戸、京都に次ぐ賑わいをみせたといわれる^{注8)}。長浜の曳山祭、近江八幡の左義長とともに湖国三大祭の1つに数えられる大津祭は、大津町の旧四宮町、現在の京町三丁目に鎮座する天孫神社の秋祭りである。現在の大津祭は、毎年10月9日に宵宮、10日に本祭が行われ、本祭の当日は天孫神社氏子のうち、14ヵ町から13基の曳山が出され、終日町中を巡行する。曳山が巡行する経路では、街路や町家に曳山を迎えるためのしつらいが行われる。

4.2 街路空間における祭礼時の演出

4.2.1 調査地区の町並みの現状

大津町は、琵琶湖に平行する京町通、中町通、浜町通の3本の通りとそれに直交する通りによって規定される短冊状の街区をもち、江戸時代には、通りを挟んで向かい合う家々がひとつの町を構成する、両側町の形態をとっていた。現在もその基本的な骨格は継承されている。

調査対象地区は、曳山の巡行経路内にかつ曳山を出す13ヵ町の曳山町内とした。調査地区の建物は平成9(1997)年の調査では木造が64.2%と過半数を占め、その43.3%がファサード・内部ともに伝統的町家の形式を維持していた。そのほかの木造建物についても31.3%が看板建築であり、建物そのものは伝統的形式を継承するものといえる。建物規模は木造では2階建が圧倒的に多く、非木造でも2階建と3階建で全体の7割以上を占め、伝統的

な町並みのボリュームを逸脱するものは少ない。つまり、ビル化の傾向はみられるものの、調査地区全体としては歴史的居住地の雰囲気維持されているといえる。

4.2.2 演出要素の分布

街路における宵宮と本祭の演出の一例を示したものが図4-1である。宵宮では曳山に載せる懸装品を飾る「宵宮飾り」が各町ごとに決められた当で行われ、その前には高提灯が置かれる。また、会所前には飾られた曳山がライトアップされ、町内の街路上に駒形提灯が立てられる。各建物には吊提灯や幔幕が取り付けられる。本祭では懸装品を飾り付けた曳山が巡行に出るため、当および街路上の宵宮の演出要素の一部はみられなくなり、代わって巡行を迎える屏風飾りが各建物で行われる。

宵宮飾りの当は、以前は持回りとする町が多かったが、現在は15ヵ町中、13ヵ町が毎年同じ家で行っている。宵宮飾りは表の建具を開放した1階表側の部屋に飾り付けられ、室内には毛氈などの敷物が敷かれ、御神体が飾られる。御神体の背後には屏風、前には御神酒、鏡餅、粽などが供えられ、夜には全体がライトアップされる。

4.3 町家の形態と祭礼時の演出

4.3.1 大津の町家

大津の町家は現状では切妻造平入、棧瓦葺、本2階建の建物が多い。しかし、2階部分はずかつて、虫籠窓をもつ2階が一般的であった。表構えが変化した原因のひとつは、昭和初年の道路拡幅の際に行われた軒切りにある。現存する町家の中に、軒切りによって建物の前面が切り取られ2階の建ちが高くなった町家が数軒確認され、軒切りが本2階の町家が増える要因となったことを示す。平面はトオリニワ形式で、間口が広い場合は2列

に、一般的には1列にトオリニワに沿って居室が並ぶ。

4.3.2 祭礼時における町家の空間利用とつらい

各町家における祭礼時のつらいは、おもに本祭の曳山巡行を迎えるために行われる。つらいが行われる部屋は1、2階の座敷のほか、2階の通りに面した居室を用いる例が、つらいがみられた44例中、39例と圧倒的に多い(図4-2)。2階のオモテノマのつらいは、大津祭における町家の空間利用の最大の特徴といえる。これは曳山巡行の際に所望される曳山上のからくりが、最もよく見える場所であることに起因すると考えられる。ここでは巡行を迎えるため、通りに面した開口部の建具が外され、敷居や手摺に毛氈が垂らされる(写真4-1)。

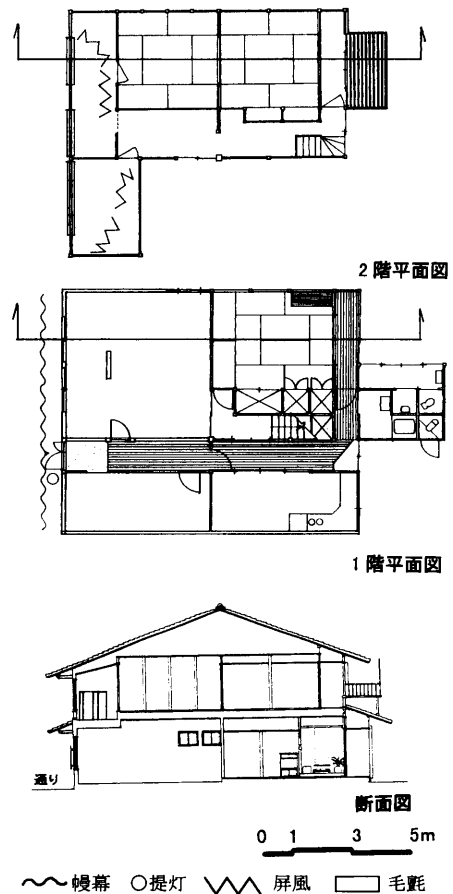


図4-2 大津における祭礼時のつらい (増田重雄家)

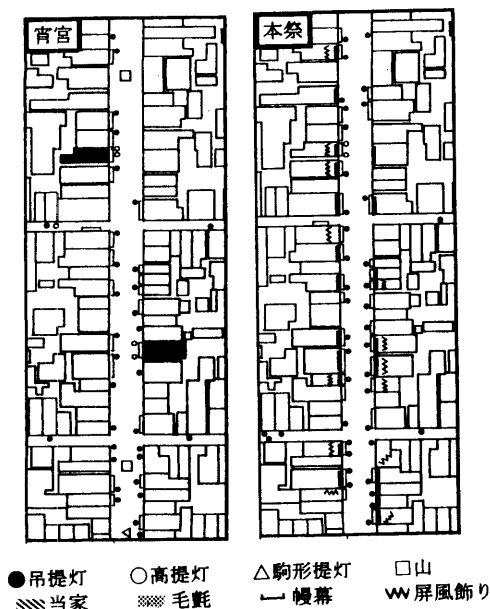


図4-1 祭礼時における中町通の演出



写真4-1 本祭の町並み：曳山と町家

部屋の奥には屏風や衝立などが立てられ、家人はその前に座って巡行を見物する。2階から見物する習慣は古くからあったが、2階に大きな開口をもつ居室が増えるのは昭和になってからで、建具を外して毛氈を垂らす演出は、比較的最近になって現れたものと考えられる。

屏風祭は1階で13例、2階で40例行われているのが確認され、屏風祭を行う町家の大半が2階のオモテノマに屏風を飾る。1、2階の屏風祭を比較すると、1階は「見せる」ことを、2階は「楽しむ」「もてなす」ことを意識したものとなっている。昭和までは宵宮に1階のミセノマの格子を外して屏風を飾り、本祭には2階に屏風を立てて曳山を迎えるのが一般的であった。そのようなしつらいが現在の形態に変化したことは、大津祭の性格が、「見せる」ことよりも、「楽しむ」「もてなす」ことに重点をおいたものに変化したことを意味している。

4.3.3 祭礼時の利用と町家の空間構成

大津町の町家の形態および空間構成には、祭礼時の利用を考慮した点が少なからず認められる。とくに2階のオモテノマは祭礼時の利用を意識した様々な工夫が行われている。まず、接客空間であることから、略式ながらも床の間などを備えたものが多数みられる。また、2階から曳山を見物するため、意識的に通りに面した開口を広くとる例が多く、なかには、2間を間柱なしで開く町家もあった。2階の天井が低い町家では、2階の床面をわざわざ下げて天井高を確保しているものもみられた(図4-2)。また、建て替えられた建物でも、ビルの2階に座敷を設けたもの、2階部分は伝統的な形態のまま残し1階のみを看板建築にしたものなどがあげられる。

4.4 祭礼時の空間利用と町家の形態

今回の調査から、大津祭における空間利用・空間演出の最大の特徴は、2階のオモテノマにしつらえられた席にあることが明らかになった。他の都市祭礼においては、2階で演出が行われる例は少なく、2階を積極的に利用していたのは大津祭のみであった。この空間利用は町家の形態と深く関わっており、町家の形態の変化が祭礼時の空間利用を変化させ、また逆に、祭礼時の空間利用が町家の形態に影響するという相互関係が両者の間に成り立っていることが指摘できた。

5. 日野

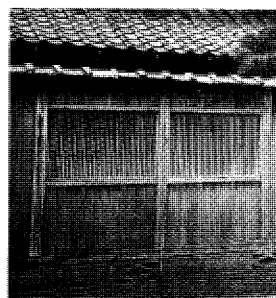
5.1 民家と町並み

日野(滋賀県)は中世の蒲生氏の城下町建設を起源とし、近世には在郷町として、また、日野商人の発祥地として発展した。宝暦6(1756)年に大火に見舞われたが復興し、現在も伝統的な民家と町並みが継承されている。

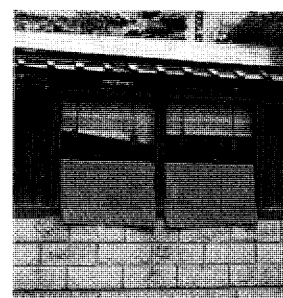
建物の外観調査を行った結果、平屋建、つし2階建、本2階建などの民家が大多数を占めていた。屋敷構えを

みると、敷地は一般に間口に対し奥行きが長く、間口は平均6間程度あって、京都や大津と比べるとやや広い。敷地内の建物配置は、間口いっぱい主屋が建ち、その奥に浴室や便所、中庭を挟んで離れ、さらにその奥に土蔵が配される。主屋が通りに面して直接建つものは多くなく、少し奥に建て、通りとの境に板塀や土塀を立てるのが一般的で、内側に前栽を設けているものがある。また、日野独特な景観を形づくるのは、主屋と通りとの間に存在するこれらの板塀や土塀と、それらに設けられた、幅800mm、高さ700mm程度の「棧敷窓」である(写真5-1)。地元の呼称ではないが、本研究では、この開口部を棧敷窓と呼ぶことにする^{注9)}。

主屋の間取りは、整形または喰違4間取りで、周辺地域の農家主屋に類似している。ニワと呼ばれる土間に沿ってデノマ、ガイドコロがあり、デノマの奥には座敷であるオクノマがあり、その背面にヘヤが配される。



日常時



祭礼時

写真5-1 棧敷窓：日常時と祭礼時

5.2 街路における祭礼時の空間演出

日野祭は毎年5月2日に宵宮、3日に本祭が行われる。本祭には神輿渡御・曳山巡行が挙行されるが、その経路は馬見岡綿向神社から、町の中心軸である本町通を通過して、御旅所までの往復である。御輿渡御・曳山巡行に関わる空間演出は本町通でおもに行われる。

祭礼時の演出要素は、宵宮と本祭とで異なる。宵宮での演出の中心は、装飾された曳山と曳山蔵周辺の広場や会議所(町内の集会所)であった。また民家における演出要素としては提灯が多かった。

本祭では、民家の棧敷窓が開放され、毛氈や御簾がかけられる。また板塀の内側の前栽には棧敷が組み立てられる。棧敷窓がない場合には、デノマやオクノマの建具を外し、祭礼用の手摺を設置して毛氈と御簾がかけられる。また毛氈をかけた床几を玄関先に出す例もみられた。主屋の入口付近には水桶が用意され^{注10)}、軒下には提灯が吊り下げられる。これらの演出要素によって、日常とは異なった祭礼空間が作り出される。

このように日野祭における空間演出の特徴は、宵宮には演出の中心が曳山蔵周辺であるのに対し、本祭では本町通が演出の中心となり、御輿渡御・曳山巡行に先立っ

て棧敷窓や建具が開放されるなどして、祭礼時の空間演出が行われる。

5.3 民家における祭礼時の空間演出

5.3.1 祭礼時における室内の空間演出

民家内部では、境界要素や棧敷窓の有無に関係なく、通りに面したデノマとオクノマがしつらえられる。大多数がオクノマを最も格式の高い接客空間として、またデノマをオクノマの次の間として使用していた。日野祭では、本祭当日の接客が重要視されており、これは日野商人の習慣²¹⁾が背景にあるものと推測される。その舞台となるのが、オクノマとデノマである。

室内では屏風、衝立が主要な演出要素となる。デノマでは衝立や二曲一隻の屏風の前に生け花を飾ってしつらえる。接客空間の中心であるオクノマには、屏風のほかに料理が並べられる。また祭りの時期が5月であることもあり、床の間などに五月人形を飾る例もみられた。

5.3.2 棧敷窓と棧敷のしつらい

前節で述べたように、本祭には本町通沿いの民家の棧敷窓が開放され、御簾や目に鮮やかな緋毛氈がかけられる。渡御や巡行の前には御簾が垂らされ、御輿や曳山が通るときに巻き上げられる。そのため、棧敷窓上部には御簾を止める金具が設けられている。

棧敷には、手摺が両脇に付くもの、床几をつないで棧敷を組み立てる形態のもの、主屋と棧敷を板で連結するものなどがあり、祭礼時に使用される棧敷は、それぞれの民家の形態に合わせてつくられている。組み立てられた棧敷には、毛氈が敷かれているが、ヒアリングによると、以前は棧敷の上部に仮設の屋根を設けていたが、最近は簡素化され、屋根を架ける例は少なくなったという。また、棧敷窓がない民家では、棧敷の機能をデノマやオクノマ、または、その前面に設けられたエンが担っていた(図5-1)。棧敷をデノマやオクノマと連続させ、一体的に活用している例もみられた。

5.4 日野の祭礼空間

日野における民家の空間構成は、祭礼時の空間演出にも大きく関わり、オクノマは接客空間、デノマはオクノマの次の間として機能している。オクノマが接客空間として使用されるのは、ザシキ本来の機能といえるが、祭礼時には、通りに対しては私的な領域性をもつ。棧敷や棧敷窓まわりも私的空間であるが、祭礼時に開放されることにより、通りを行く人に見られる空間となる。またニワは行列に加わる人の休憩場所として使用される。したがって、棧敷やニワまわりは、いわば半私的・半公的空間であるといえる。実際にデノマとオクノマの境の建具が開放される場合や、棧敷窓が開放され御簾越しに家の中が覗かれる可能性がある場合には、衝立などの遮蔽

物が置かれる。衝立は、空間を完全に分断せず、オクノマが私的空間であっても、視線を避けつつ通りの気配を感じられるような空間をつくるのが可能である。このように、境界要素や前栽を通して、通りから主屋までが段階的な空間構成となることにより、日常は塀などの境界要素や格子などで閉鎖されている日野の民家も、半公的・半私的空間を介して、通りと一体となった祭礼空間となる。日野祭における空間演出は、居住者が祭りを楽しみ、客をもてなすことが主であるが、棧敷窓の開放には棧敷から祭りを「見物」するだけでなく、通りに対して「見せる」要素もあることがわかる。

このように、祭礼時の日野の民家では、私的空間であるオクノマから公的空間である通りまで段階的に空間が構成され、棧敷やニワ、デノマという半公的・半私的の性格をもつ空間を介して、全体としては通りと一体となった祭礼空間が生みだされていた(図5-2)。棧敷窓は、祭礼空間を現出する重要な装置であるといえる。

近年には、祭礼時のしつらいを行わない、行っても棧敷を出さない、棧敷の屋根を架けないなど、簡素化する

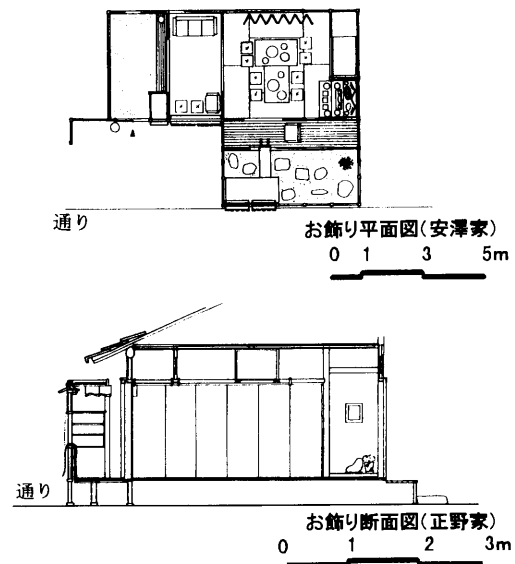


図5-1 日野お飾り実測図

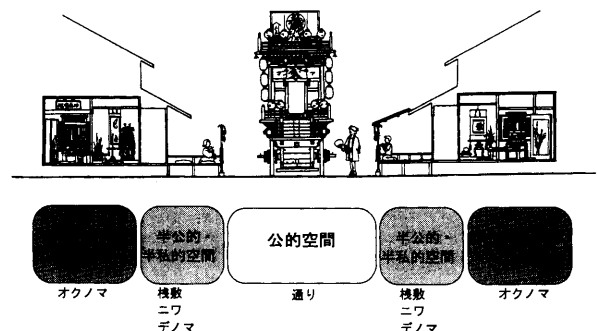


図5-2 民家が通りと一体になった祭礼空間

民家が増加している。その一方で、新築家屋でも通り側にザシキを設けたり新規に棧敷窓をつくるなど、祭礼時の伝統的な空間演出を意識した形態を踏襲したものも増えてきている。

6. 城端

6.1 城端曳山祭の概要

北陸地方は曳山祭の集中地域で、現在、富山県で15カ所、石川県で32カ所、福井県で4カ所の合計51カ所で曳山祭が行われている^{注12)}。その中でも、華麗な演出で注目されるのが富山県城端曳山祭である。毎年5月15日に6カ町が所有する曳山の巡行が行われ、前日の宵宮には、山車に載せる御神体が、山宿と呼ばれる当番宅で、屏風や供物とともに飾り付けられる^{注13)}。ここでは、城端曳山祭における空間演出を、街路空間と山宿のお飾りの2点から検討する。

6.2 街路空間の演出

曳山祭の宵宮から巡行当日には、街路に面する建物の表構えに、幔幕や釣提灯、行灯、簾が飾り付けられる。巡行路に面する全建物、総数470軒について、これらの分布状況を調査した結果、全体の43%の建物に何らかの飾り付けがなされていた。このうち、幔幕の有無と巡行路に面する建物形式との関係を見ると、街路に面して建つ建物、とくに伝統的な町家に幔幕が飾られる割合が高い。伝統的な町家は、特定の街路に集中して分布しているため、飾り付けの分布もその街路に集中する傾向がある。例えば図6-1に示すように、伝統的町家の家並みが続く(A)の通りには幔幕や釣提灯、簾の分布が多い。一方、(B)の通りには飾り付けがほとんどみられない。

6.3 山宿の空間演出

城端では、個人の住宅を開放して宵宮のお飾りを行う、当番制による山宿のシステムが、根強く継承されている。山宿は当主一代に一度の役柄とされ、山宿に予定されると、宵宮のお飾りのために住宅の改造や模様替え、調度品の収集などの準備が相当の費用をかけて行われる。

伝統的な町家の間取りはトオリニワ型で、オモテノマ、ナカノマ、オクノマの続き間からなるものが多い。間口2~3間、奥行きは6~8間で、オクノマの後方には庭が設けられる。山宿のお飾りには、1階のオモテノマ、ナカノマ、オクノマが襖を外し、さらにオクノマ後方の庭とも連続させて一体的に利用される点が特徴的である。表構えの障子戸やガラス戸が取り外され、お飾り場の空間全体が通りに向かって開放される。ザシキの畳が新調されて、敷居を外して縁を通した形に敷き換えられ、床の間に掛け軸、生け花、香炉が飾られる(写真6-1)。

オクノマの中央には御神像が安置され、その前面に赤

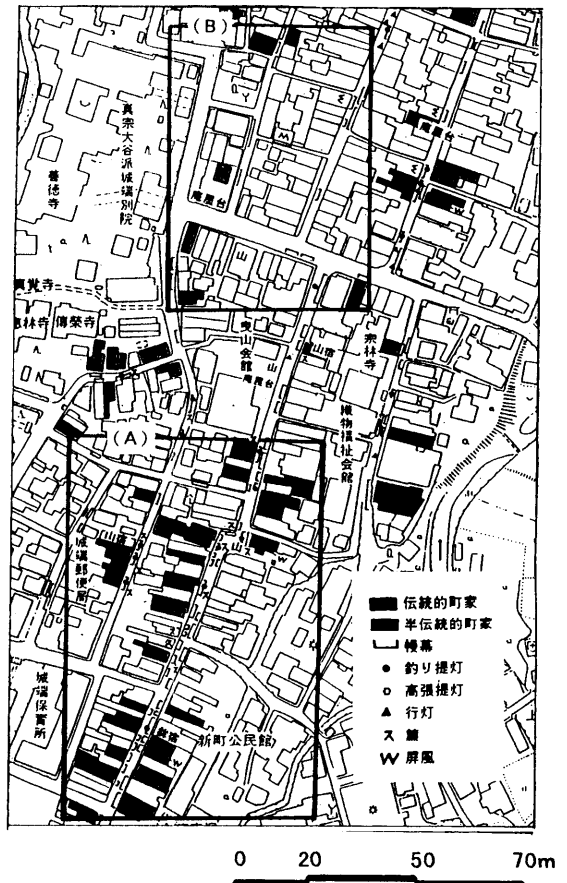


図6-1 城端と建物形式と街路空間の飾り付けの分布



写真6-1 伝統的町家の山宿飾り

飯と神酒が供えられる。ナカノマの両側には脇人形が置かれ、オモテノマには生け花が飾られる。また御神像の背後には座敷簾がかけられ、後方の庭を簾越しに見通すことができる。お飾りの両壁面に沿って、絵屏風や書屏風が真っ直ぐに立てられ、壁が埋め尽くされる。このように縁を通して直線状に敷かれた畳、壁に沿って真っ直ぐに立つ屏風、御神像の後方に見通せる庭が相互に作用して、町家の深い奥行きを、さらに強調する効果を与えている。

6.4 山宿と住宅改造

山宿当番が、お飾りを自宅で行うためには、続き間のザシキと庭をもち、オモテノマを街路に開放できるなど、

一定の形式の住宅であることが必須条件となる。そのため、併用住宅の場合ももとより専用住宅の場合も、様々な模様替えが行われる。

図6-2は、RC造の事務所兼住宅の1階をお飾り場に模様替えした例である。この住宅では、事務所と車庫部分のRC造の壁の内側に柱と壁を仮設し、床の間付きの続き間ザシキをつくり出した。またザシキ後方に庭を設けることができないため、ザシキの前面に仮設の庭を設置するという手の込んだ造作が行われた。

図6-3は、専用住宅の場合の模様替えの一例である。①三間続きのザシキの幅を揃えるために、押入の襖と壁を外し、オモテノマを玄関側に張り出す。②敷居を外し、前面から畳を直線上に敷き直す。取り外した敷居の分、ザシキ後方にできた空間に板をはめ込む。③建具をすべて取り外す、などが行われた。こうした模様替えが可能のように、当初から計画されているのである。

地域社会における山宿の位置付けが高い城端では、新築にあたって、将来山宿を務めることを意識して間取りや細部意匠を考慮している。そのため、祭りのための住宅の集積が城端の町並みを形成し、祭りがあるが故に、伝統的な町並みが今日まで維持されてきたと考えられる。

7. 結論と課題

以上、5つの都市祭礼の詳細調査の報告を行った。これらに共通する特徴について検討してみたい。まず、街路空間における特徴についてみると、街路を挟んで町家（日野の場合は板塀）が連なるいわゆる両側町の形態と祭礼時の演出が深く関わっていることがあげられる。両側の町家によって閉ざされた街路に曳山が置かれ、あるいは巡行する。それを効果的に演出するために、町家のファサードへの装飾が行われるのが一般的であった。具体的にみると軒庇を利用して、幔幕をかけ、提灯を吊るのが定型といえる。日常的には町並み景観に連続性を与

える軒庇の祭礼時におけるはたらきといえる。

町家についてみると、その空間的特徴をうまく活用した演出が共通してみられた。まず、町家のもつ街路への開放性である。もちろん、日常時の町家の表構え自体は、閉鎖的であるが、祭礼時には揚げ店を落とし、格子を外して、建物内部と街路が一体となった演出を行う例が、どの都市祭礼についてもみることができた。日野の特異な棧敷窓は、農家的な屋敷構えの中で、町家風の祭礼演出を行う工夫であるともいえる。

また、町家の空間的特徴として、続き間の利用が可能なのがあげられるが、祭礼時の演出にも効果的に活用されていた。トオリニワの演出も、奥行き深い町家の空間的特徴を引き出したものといえる。その中で屏風などの演出要素がうまく生かされていた。

社会的な側面に関係する演出についてみると、町内所有の曳山懸装品を飾ることが一般的に行われていた。町会所をもつ場合には、会所飾り（京都、亀岡）となり、また、特定の家で行うのが当屋飾りや宿飾り（鞍馬、大津、城端）である。この差違は、地域社会における共用施設の維持管理システムの差違が反映されているといえる。会所飾りを行う場合は、会所自体が祭礼時の演出を考慮した空間構成になっていた。会所飾りのしつらいは、御神体を飾りの中心に据える点が特徴的であるが、そのほかは、街路への開放性と続き間を生かす点は、屏風飾りなどの家飾りと共通していた。

こうした共通点がある一方、それぞれに特徴的な演出もみられた。大津では、町家における空間演出が、町家の形態をうまく活用しているのみならず、町家の空間利用が町家の形態を変化させた例である。また、日野の民家は町家ではないが、その代わりに街路に沿って板塀や土塀を立て、それらが連続して独特の町並み景観を形づくっている。こうした景観は、ほかの集落にも類例をみることができるが、日野では祭礼を見るために、板塀や

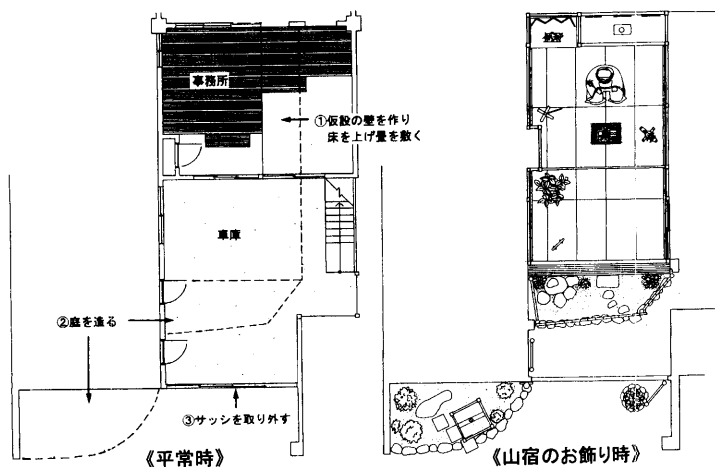


図6-2 事務所併用住宅の模様替えの事例

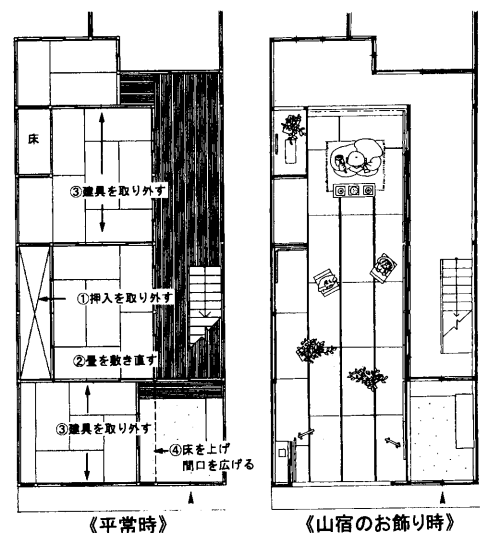


図6-3 専用住宅の模様替えの事例

土塀に棧敷窓を開き、独特の屋敷構えを生み出した。

また、形態への影響のみならず、地域の建物更新や町並み形成と祭礼時の空間演出が関わっているのが、城端の例である。祭礼に伴い、建物の改築を行う例では、祭礼時の建物の演出が、建築形態のみならず、建築生産システムと深い関わりをもつ。つまり、町家のステイックな形態のみならず、改築を可能にする建築技術、モジュール、独特の建具の生産などが、祭礼時の演出と関わっているのである。

最後に、今回、十分に明らかにすることができなかった点を課題として、整理しておきたい。

ひとつは、このような都市祭礼における空間演出の歴史的考察である。歴史的考察の意義は、それ自体学術的に意義があることはもちろんであるが、町家や街路空間の形態と祭礼時の演出の関連を検討するためにも、より精緻な考察を加える必要がある。しかし、都市祭礼に関する史料として、祭事・神事に関する記録は比較的豊富だが、町家や街路空間における空間演出に関する史料は少ない。史料の発掘に努めるほか、絵画史料の読み取りや、ヒアリングデータの検証などを積み重ねていかねばならない。

もうひとつ重要な課題は、こうした空間演出の相互の関係である。本研究は京都祇園祭を調査の出発点とし、西日本各地の都市祭礼にその影響をみることができた。街路を曳山が巡行する形態自体も明らかに祇園祭の影響であるが、会所飾りとその変形ともいえる当屋飾りの形態、屏風祭なども、その影響といえる。こうした祭礼演出の文化的伝播も、重要な研究課題である。

さらに研究を深め、祭礼時の空間演出を新しい視点から再評価することで、歴史的町並みの保存・整備に新しい視座をえ、具体的手法の検討も可能となろう。

今、全国各地で祭りを柱にした町おこし・村おこしが進められている。その内容をみると、地域の活性化、施設の建設、民俗行事・技術の継承などがその事業の中心である。本研究で明らかにしたように、祭礼時の演出がその都市の空間構成を特徴づけ、民家の形態にも影響を及ぼすことを考慮に入れた市街地整備、新しい都市住宅の提案などが行なわれてもよいと考えられる。

<注>

- 1) 建築学の領域の祭礼研究としては、祭儀空間の研究が、その中心であったが、民家における演出の研究もみられるようになった。最近の研究として文献19)や、文献20)などをみることができる。
- 2) この研究会で行ってきた予備的調査では、町家と街路に積極的な演出がみられるのは、街路を曳山が巡行する形態をとる祭礼に多いことが明らかになっていた。
- 3) 本編の紹介分のほか、近江水口、伊賀上野、丹波篠山、越前三国湊、越中八尾、高岡などの祭礼でみられた。
- 4) 文献3)、4)などの報告を行っている。

- 5) 亀岡祭については、谷が文献6)に詳述している。
- 6) 町会所の現代的機能について、文献2)でも検討を加えた。
- 7) 民家と町並みについては、新谷が文献7)で報告している。
- 8) 大津市：新修大津市史、vol. 1～10、1978～1987
- 9) 日野の居住者による文献10)で初めて記述がみられる。
- 10) 水桶は御輿渡御や曳山巡行に加わる人の飲用水として準備されていたが、近年では藤の花とともに水桶をしつらい、実用的というよりも、装飾的な要素が強くなった例もみられた。
- 11) 文献11)によると店持ち商人は祭りには必ず日野の本宅において客の接待にあたらねばならなかったという。
- 12) 文献16)に記載された曳山祭47カ所に、独自調査によって明らかにした福井県下の曳山祭4カ所を加えた。また、研究会の報告としては文献17)、18)がある。
- 13) 文献15)による。

<参考文献>

- 1) 中尾達雄、増井、谷、新谷他：都市市街地の形態と祭礼演出に関する研究—京都・祇園祭山鉦町における伝統と変容—、都市計画論文集、vol.26、1991
- 2) 増井、谷、新谷他：歴史的都心における伝統的共用施設の現代的機能に関する研究—京都・祇園祭山鉦町の町会所について—、都市計画論文集、vol.27、1992
- 3) 谷、岩間、増井他：都市祭礼における空間演出のファッション性に関する調査研究、ファッション研究助成成果報告書、1993
- 4) 谷、増井編：まち祇園祭すまい—都市祭礼の現代、思文閣出版、1994
- 5) 民俗祭事調査会編：民俗祭事の伝統—丹波・亀岡のまつり、1992
- 6) 新修亀岡市史編集委員会：新修亀岡市史資料編第4巻、1996
- 7) 京都市計画局編：鞍馬 町なみ報告書、1980
- 8) 林屋辰三郎、飛鳥井雅道、森谷尅久編：新修大津市史、vol. 1～10、1978～1987
- 9) 加藤、増井、谷他：大津祭の空間演出に関する研究 その1～3、日本建築学会学術講演梗概集、1996
- 10) 和田節雄：塀につくられた窓、民俗文化、vol.92、1971
- 11) 荻谷勇雅：日野、歴史の町なみ近畿編所収、日本放送出版協会、1982
- 12) 日野町教育委員会編：日野曳山調査報告書、1990
- 13) 荻谷勇雅：都市景観の形成と保全に関する研究、1993
- 14) 加藤、増井、谷他：近江日野町における調査研究 その1・その2、日本建築学会近畿支部研究報告集、vol.38、1998
- 15) 城端曳山史編纂委員会編：城端曳山史、1978
- 16) 宇野 通：加越能の曳山祭、能登出版部、1997
- 17) 碓田、西岡、岩間他：北陸地方における伝統的街並みと祭礼時の空間演出に関する研究、日本建築学会近畿支部研究報告集、vol.37、1997
- 18) 碓田、谷、増井他：北陸地方の曳山祭にみる住空間演出の特色、日本建築学会近畿支部研究報告集、vol.38、1998
- 19) 土肥博至編：環境デザインの世界—空間・デザイン・プロデュース、井上書院、1997
- 20) 伊藤則子、高野公男：伝統行事から見た町並み空間の地域性について—大石田河岸集落に伝わるおひなみの調査研究、日本建築学会学術講演梗概集、1998

<研究協力者>

- | | |
|-------|------------------|
| 加藤 直子 | (株)文化財保存計画協会 技術員 |
| 永井 淳子 | 奈良女子大学大学院修士課程2年 |
| 金田 直子 | 奈良女子大学大学院修士課程1年 |